

荒涼とした大地で営まれる人間模様

中野 理恵

不思議な映画だと思った。薄茶色の砂に覆われた大地が続く世界最大規模の砂漠、アルジェリアのサハラ砂漠。そこに建つボツンと白くて四角い建物が、初老の女性マリカの営むカフェ兼雑貨屋だ。だが、商品がさほど並んでいるようには見えない。カメラはこの建物の中と、強烈な太陽を照り返す砂に覆われた家の外だけを延々と映す。上映時間メいっぱい書いても過言ではないだろう。眠くなるほどだ。砂を照り返す陽ざしの強さがスクリーンのこちら側にも伝わってくる。建物の外に時折トラックが止まる。カフェのお客さんである。マリカは頭をスカーフで覆い、大きく出っ張ったお腹とお尻を、濃い茶色の洋服で包み、「よっこらしょ」と立ち上がり、コーヒーやお菓子を供し世間話を始める。訪れる客は長距離トラックの運転手など男性ばかりで、どうやら一日僅か数人のようだ。時折、小柄な猫が入ってきて入口の壁に置いた椅子に座り、せっせとグルーミングをする。それを見てもマリカは知らん顔で、声もかけない。猫もマリカにじゃれることもなく、ひとしきりペロペロと体毛を舐めると去ってゆく。

マリカはたったひとりで、この荒涼とした土地でずっと暮らしてきたのだろうか。そんなわけはないだろう。でも、家族や友人はどうして登場しないのだろうか。買い物はどうするのだろうか。寂しくないのだろうか。水はどこから汲んでくるのだろうか。洗濯はどうしているのだろうか。夜は不用心ではないだろうか。監督はどうしてマリカを知ったのだろうか、等々、カメラが僅かしか移動しない薄茶色の画面をじっと見つめながら、そのような疑問が次々と湧く。

砂漠が印象に残る映画と言えど何と言っても



©143 rue du désert Hassen Ferhani Centrale Électrique - Allers Retours Films

『アラビアのロレンス』(1962年イギリス製作／デビッド・リーン監督)。太陽がゆらゆらと照る砂漠の彼方から、ラクダに乗ったオマー・シャリフ演じるベドウィン族の族長アリが、少しずつ姿を現す場面は、いつまでも忘れることのできない印象的なシーンだ。また、10年ほど前、イランのイスファハン映画祭に行った際、往路はテヘランから飛行機だったのだが、復路はジープで延々5時間だったのだろうか、砂漠を車で横断した。薄茶色の砂以外何もないところを走る。時折現れるオアシスにほっとするのだが、すぐに再び延々と砂で覆われた大地に戻る。この荒涼とした土地で人々の生きた時間が数千年も続いてきた、とは想像もつかない。イラン人の運転手と私、他にも同乗者がいたのかもしれないが、記憶は薄れている。だが、窓外に広がっていた砂漠は今でも鮮明に蘇る。

さて、映画は後半になると息子が現れ、医者である妻と彼が離婚したことをマリカが責め、マリカが何かとお喋りをする、などなどの展開をみせる。本稿を書きながら、やっと本作のメッセージを理解した。〈時間〉ではないだろうか。劇場の大スクリーンでもう一度見たい。

《Cinema Information》

『サハラのカフェのマリカ』

アルジェリア・フランス・カタール合作映画(104分)
／監督：ハッセン・フェルハーニ／8月26日(金)よりヒューマントラストシネマ渋谷ほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。